

BPT026-06

会場:201B

時間:5月24日 15:30-15:45

ユーラシアにおける大型オナガザル亜科化石の進化史：頭骨内部構造の形質と拡散経路

Evolutionary history of large cercopithecine monkeys in Eurasia: internal cranial morphology and dispersal route

西村 剛^{1*}, 高井 正成¹

Takeshi Nishimur^{1*}, Masanaru Takai¹

¹ 京都大学霊長類研究所

¹ Primate Research Institute, Kyoto Univ.

Procynocephalus と Paradolichopithecus はユーラシア大陸の中部鮮新統から下部更新統からみつまっている大型のオナガザル亜科のサルである。その系統的位置に関しては、現生のマカク属に近いとする立場とヒヒ類に近いと考える研究者に見解が分かれている。従来、中国とインドからみつまっている化石は前者に、ヨーロッパと中央アジアから発見されている化石は後者に分類されてきた。しかし両者の間では、頭骨や歯などの外部形態にはほとんど違いは見られないため、両者を同属と見なす研究者もいる。化石を産出している年代と地点を傾向から、この両者はおそらく前期鮮新世に西部ユーラシアで出現し、東方に分布域を拡大したと考えられている。今回、3地点（フランスの Seneze、タジキスタンの Kuruksay、中国甘肅省龍担）からみつまっている Paradolichopithecus の頭骨吻部の内部構造を CT 機器を使用して解析した結果、形態的に大きな違いがあることが判明した。西ヨーロッパの Seneze 標本と東アジアの龍担の標本では上顎洞と呼ばれる構造を持っていないが、中央アジアの Kuruksay 標本では未発達ながら上顎洞の存在が確認された。従来のユーラシアの西部と東部で属を分ける分類と、上顎洞の有無を中心とした頭骨内部構造の形質とは一致していないことが明らかになった。

上顎洞は頭骨内部の特徴的な形質であり、原始的な霊長類では存在していたが、現生オナガザル亜科の祖先種では消失していたと考えられている。その後オナガザル亜科内ではマカク属の系統のみで再度形成されたと考えられている。龍担の化石種では原始的な状態（上顎洞が存在しない）を保持したまま東アジアまで拡散したが、Kuruksay の化石種では別の系統として独立して上顎洞を獲得したと考えられる。したがって中央アジアの Kuruksay の化石種と東アジアの龍担の化石種は、ユーラシア西部から別々の拡散経路をたどって東方に移動してきた可能性が高い。

キーワード: オナガザル亜科, ユーラシア, 拡散経路, 上顎洞, 霊長類

Keywords: Cercopithecinae, Eurasia, dispersal route, maxillary sinus, Primates